

日本語非母語話者の母親は小学生の子どもの宿題をどう支援しているか —インタビュー調査から—

菅野沙也香 (筑波大学 大学院生)

1. 研究の目的

近年、来日する外国人家庭や国際結婚家庭の増加に伴い、家庭内で複数の言語が使用される環境で育つ子どもが増加している。家庭内で複数の言語を使用する親子を複言語背景を持つ親子とする。保護者が抱える悩みは「学習」と「言語」と「教育」に関わることが多い。複言語背景を持つ子どもへの支援は増加しているが、その親への満足のいく支援はなされているとは言えない現状である。親は子どもの学習・言語・教育に問題を抱えながらも待たなしに成長する子どものこうした問題に向き合っていかなければならない。本研究では、学習・言語・教育において問題を抱えている複言語背景を持つ親子が、子どもの家庭学習の中でも主に子どもの宿題をどのように実践しているか、その現状を明らかにする。

2. 先行研究

複言語背景を持つ親の学習への関わりを調査した先行研究では、柴山他(2012)、清水(2006)、真嶋(2019)が挙げられるが、複言語背景を持つ「親」を対象とした研究は少ないのが現状である。また、複言語背景を持つ親と子どもが実際にどのように家庭学習を行っているのか、その実践内容は明らかにされていない。本研究では、複言語背景を持つ「親」を対象とし、親子の宿題の実践に焦点を当てる。

3. 調査協力者

研究協力者は、長期的に日本に定住し、公立小学生3年生の子どもを持つ日本語非母語話者の母親(以下Cと表記)である。Cとは発表者が携わる小学校の日本語教室で出会った。Cはアフリカ大陸出身で小学校3年生と3歳の子どもを持つ母親である。日本語がほとんど話せず、あいさつ程度の日本語のみ可能である。Cの配偶者も同国の出身である。Cの職業はオンラインの英語講師であり、配偶者は日本の企業に勤務している。Cと配偶者の母語はアラビア語とフランス語である。Cは日本語がほとんどできないにも関わらず、子どもの複言語教育は熱心に行っているということだった。そのため、複言語背景を持つ親がどのように家庭で子どもの教育に関わっているのかを探る上で非常に興味深い回答が得られると予測したため、CとCの子どもに調査協力の依頼を行い、承諾を得た。

4. 研究方法

2020年6月に約1か月間CとCの子どもに、自宅でCの子どもの宿題と一緒に取り組んでもらった。取り組みの内容は指定しなかった。宿題の内容は、国語の教科書の音読が毎日課されるものである。音読に加えて、国語の漢字のドリルの漢字練習または算数の計算ドリルが交互に課される。

2020年7月に半構造化インタビューをCの自宅で2時間程度かけて行った。Cへのインタビューは英語で行い、録音したものを後日筆者が日本語に翻訳した。翻訳は、日本語と英語が堪能な第三者にダブルチェックを依頼し、その妥当性を確認した。インタビュー内容は後日文字化し、親子の宿題の実践に関する部分を抜粋の上、考察した。

5. 結果と考察

家事と育児と仕事で忙しい中、日本語の能力がなくても、子どもの宿題は教えてあげなければならないと思うCは、携帯電話の漢字翻訳アプリやポスター、自作の単語カードなどの学習支援ツールを使いながら、毎日の宿題を教えている様子が窺えた。斜線部はCの語りである。

5.1 宿題にかかる時間

子どもの宿題に取り組む時間について「父親は日本語が上級レベルなので日本語の宿題を教えられるが、仕事が忙しく、平日の帰宅時間は遅く、宿題を教えられない。」ため、「自分(C)が毎日宿題を教えているが、日本語の学習をしたことがなく、日本語がわからないために何時間も宿題に時間がかかるのでとても大変」で、「休憩を取りながら、3時間か4時間くらいかかっているので本当に大変。

夕飯が22時になってしまう」の回答からも、多くの時間を宿題に費やしており、苦勞している様子が見られた。一般的な小学生の毎日の宿題にかかる時間を調査した統計と比較すると3~4倍の時間を要していることがわかった。複言語背景を持つ親子はC親子のように、複言語習得のために毎日の家庭学習の時間を決めている場合があり、Cが「家庭学習の中で、宿題は一部分でしかない」と語ったように、宿題以外の家庭学習の全体量からすれば、宿題は彼らが行わなければならない学習のほんの一部である。

5.2 支援が難しい教科とその理由

Cは教科の中でも「国語が一番難しい。」と語り、「同じ漢字でも読み方が違うこともあるし、意味が違うことがある」と話しているように、国語の宿題が一番難しいと感じられ、漢字の意味や読み方に問題を抱えている。宿題を教えるときに困っていることは何か、という質問には「(漢字の)意味です。意味です。意味。時間がかかる。本当に。」と強調した。「1つの漢字に10分以上ほとんど意味調べでかかりますから、全部終わるのに100分以上かかるときもあります。終わったところは簡単です。でもこのページのように新しいページの漢字の熟語の意味を少しずつ探していると、とても大変です。それでストレスフルです。」と述べている。非漢字圏出身で日本語学習歴のないCは、漢字が読めないのでもいつも携帯電話の翻訳アプリを使用するが、翻訳アプリを使っても漢字の意味や読み方は非常に多いので、どれが正しいのか判断できず、それが一番大変だと語った。漢字の読み方がわからないので、宿題である国語の教科書の音読をさせても、子どもの漢字の読み間違いに気づいてあげられないと語った。

5.3 Cの宿題支援に見られる工夫

Cは学習に「歌やYou Tube、NHKなども用いています。学校の日本語教室も役立っています。youtubeやGoogleの写真なども役立ちます。インターネットが説明に役立ちますね。」と語り、宿題で困ったとき助けを求めるものは「Google translator」であり、言語の教育のために「(インターネットで)物語やアニメを見せている」と述べているように、Cはインターネットを駆使して宿題の支援を行っている。またCは「ときどき、(子どもが)2年生の時ですね、youtubeで子どもが国語の音読をしている動画があって、私が手伝えないから、その動画を聞いて、子どもに繰り返させました。」とCはインターネットの動画で小学生が音読している場面を子どもに見せ、模倣させることでその問題を解決している。複言語背景を持つ親子が宿題で問題を抱えた場合、インターネットは非常に役立つ学習ツールである。音読に関してCは、「日本語ボランティアの友人からもらった国語の(漢字のふりがなつきの)教科書を見ながら、私がチェックします。ひらがながあるので助かっています。」と語り、日本語が堪能でない親にとってのルビつきの教科書の必要性を指摘した。複言語背景を持つ親子が宿題を遂行する上で家族や友人、学校の教員や学校の日本語ボランティアなどの周囲の人々の支援は欠かせないものである。

6. まとめ

Cの語りから、次の3点が示唆された。①複言語背景を持つ親子は宿題に時間を要するため、家庭学習では複言語学習が行われていることも視野に入れ、学校の宿題の量は複言語学習のための時間も考慮する必要がある。②親子の宿題の取り組みから、インターネットの動画やアプリが宿題遂行のための助けになっている。今後益々増加する複言語背景を持つ親子の家庭学習を支援するためには、ICTを使用した学習支援ツールの開発が望まれるだろう。③複言語背景を持つ親が子どもの宿題を支援するためには、友人や学校の教員、学校の日本語ボランティアなどの周囲の人々の支援は欠かせない。

以上の示唆が得られたが、今後益々増加する複言語背景を持つ子どもの学習のためには、家庭学習は欠かせないものであり、それを支援する親への日本語教育の支援が重要であると考えられる。

【引用文献】

柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲・高橋登・池上摩希子(2012)

「独日国際児の現地校・補習校の宿題遂行過程—親子の共同行為という視点から—」『異文化間教育』36, 105-122

清水睦美(2006)『ニューカマーの子どもたち 学校と家族の間の日常世界』勁草書房

真嶋潤子(2019)『母語をなくさない日本語教育は可能か 定住二世児の二言語能力』大阪大学出版会